

中
勘
助

遺

品



遺

品

昭和二十年六月二十五日

私は東京の家から手まわりの物をこちらへ送るときに亡くなった兄の遺品をいくつか一緒に箱につめた。気の毒な兄はその因果な性格のために五十幾年私に対するいわれのない敵意から解放されることができなかつた。というよりはその毒を含んだ性格がいつでも噛みつけるように鎌首を立てて機会を覘うかがっていた。人びとの度たび

の骨折りも、私の限りない譲歩も、事情や境遇の変化も、兄自身の不治の難病も、何物もほんの一時的にしか事態を善くすることができなかつた。兄はその年齢、腕力、家族的、社会的地位等自分に有利なそれぞれの条件を悪用して殆んど手段と場合とを択ばず私を誹謗ひぼうし、侮辱し、嘲笑し、冷遇し、虐待した。にもかかわらず私は焦土となるかもしれぬ東京に残しておくに忍びない遺品としてこれらを送つたのである。それほど兄は一面同情し愛憐あいれんすべき性格をもっていた。そうしてそれ故にこそ師弟からあのように愛敬され、悪宣伝に踊る人びとから私が不

利な誤解をうけて深刻な忿懣ふんまんを抱かねばならなかったの
 である。実にその性格には光明なきがゆえの暗黒ではな
 くして、光明と共棲きょうせいしつつそれに反抗し、敵対し、逆
 行する執拗しつよう強烈な業病的暗黒があった。そしてそれが時
 代錯誤的家族制度、その道德？ と雌雄の蛇のごとく絡から
 みあったがために一層醜悪に解きほぐしがたいものとな
 った。ただ日に月に逼り来せまって身心をうち拉ひしいでゆく老
 齡と、亡くなつた姉の眞実こめた諫言かんげん、涙をもつて、時
 には命をかけてした諫言が何ほどこかその不幸な性格を和
 げることができたばかりである。とはいえ終ついに私どもに

とつて最後のものとなつたあの夜のさし向いの話、筆談を交えた不自由な話を真に兄弟らしい友愛の情をもつてすることができたのはせめてものなんたる喜びであろうか。

ここに長さ七寸幅五寸ばかり、朱漆の研ぎ出しの箱がある。釣道楽の人が一般にそうであるように、兄も魚を釣ることから一足進んで釣道具を拵えたり細工をしたりすることをはじめた。お仲間に教わつて釣竿を塗るのから、しまいには盆だの食卓だの手当り次第に塗りたくつ

て自分もかぶれ家の者もかぶれさせて悩ませたが、生来かぶれやすくてかぶれをなおす薬にもかぶれるという私だけがかぶれなかったのは一興だった。その腕だめし、腕自慢のひとつがこれである。手際が悪く漆が厚くて重いかわりには丈夫らしい。内側は黒くしてある。なかに遺品の数かずがはいっている。

まず最初に持ちつけの懐中時計を出してみよう。兄はこれを釣りや散歩のおりに忘れず身につけ、家ではいつも坐る茶の間の席の後ろの床のうえに、寝るときには必ず枕もとにおいていた。病気で頭が悪くなったにかかわ

らずそうした習慣は健康なじぶんと少しもかわらず、必要以上、必要以外にまで時計にこだわる現代人的、都会人的、はた知識人的偏癖をそのままもちつづけていた。時計はごく簡単で実用的な小さい時計おきのうえに斜ななめに立っている。これは昔独逸ドイツへ留学中に買ったものらしい。その頃には日本へ持って帰るくらい珍しい物だったのかもしれない。針は三時二十五分のところで止っている。時間という為体えたいのしれないものの有るか無きかの一点のこの円板上の仮の位置をなにか意味ありげに根気よく指し示しながら。同じく為体のしれぬ寿命という時間

の異名めいたものの七十二歳のところであたかも時計のぜんまいが切れたように心臓の鼓動をとめて兄はこの世から姿を消してしまった、五十年の無慚むざんな争いの、最後の和なげやかな会談のこよない記念でもあるかのようによこの粗末な時計を後に残して。

次には郵便切手をやや長めにしたぐらいの厚紙の札である。反物のたとう紙を切ったものらしい。もののいえない兄が電車や汽車にのるときに使ったので、かた面には行き先、他の面には帰り先がかいてある。知らない人は子供のいたずらとも思うであろうこれらの紙きれを見

るにつけても私にはありし日の思い出がしんしんと湧いてくる。なかで動坂^{どうざか}、室町、柳島^{やなぎしま}、上野駅、錦糸堀車庫前とかいた五枚は亡くなった姉の手だが、どれにもあの手のよさが見えないばかりか、線が曲つたり、画が歪んだりしてるのは蜘蛛膜下の溢血^{いっけつ}をやった後のものだろう。最後のひとつが特にひどくて小学校の一年生の字だ。病後間もないものである。不治の病人が不治の病人を互に悩み苦しみなから世話をし世話をされて、しかもその病気や、誤った家族制度や、その道徳も手伝ってるにしても、若い時から、健全なじぶんから、家庭にお

いては常に憂鬱で、短気で、些々たることにも不快を感じ易く、怒り易く、家族と団欒して楽しむことができな
い兄の不幸な性格のために一日として明朗に愉快に暮せ
なかつた惨澹たる有様が苦しく私の胸を打つ。ほかの札
は帰り先が市電の豊川いなり前なのに上野駅のだけが赤
坂見附になつてるのは地下鉄だからである。地下鉄が出
来て間もなく兄はそれまで市電や省線で上野駅へいった
のを地下鉄にしたいといひだした。時間からも乗換えの
ない点からも尤もなのだが、新規の試みとなると独り
で出来ない。で、まず私が上野駅まで試乗してみたよう

に思う。そして乗りおりの具合やら、駅の目じるしやら、兄のために必要なことを見ておいてから私なり姉なりが二、三回ついていって覚えさせるのだ。が、幾台も連結された車輛はちようど駅名の出てるところへ止るとは限らず、そのうえ外が見えないので適当な目じるしが無い。それを兄が右左に首を振ねじむけ一所懸命に覚えようとする様子を見て ああ気の毒なものだ とほろりとする気もちになる。上野から汽車で松戸のだなごにゆくのだ。川にもやってる肥こやし船をひとは嫌って近よらないのに自分分は鼻が悪いから平気で、船頭にたばこをやって船のう

えから釣らせてもらおうというのが自慢で、お仲間の誰彼に端書はがきでいってやれとせがんで度たび姉を困らせた。釣道具の店を出してる村長さんと懇意になっていろいろ教わったらしい。その人は赤坂の家へも一、二回訪ねてくれたが兄より先に亡くなった。ほかにもお仲間で年下の元気な人が癱人の兄よりも一足も二足も先にいったのがいくらもあるらしい。まざまざしい老少不定である。二ふた子新地前こしんちまえという一枚は私の手だ。姉が冠状動脈閉塞症でいよいよ筆がもてなくなつてからのものだろうか。多摩川の鮎のだが、その頃兄はもう重い鮎竿を使えないくら

い老衰し、大抵は竿をもたずに、それでも釣師らしいいでたちだけはして釣りの景況を見物にいった。癩人となつて三十年、天気と健康のゆるすかぎり、終ついに体が堪えられなくなるまで存分に好きな釣りをすることができたのは不幸中の幸いであつた。実に大きな幸いであつた。これなくば兄も周囲の者もまっ黒に落ちかかってくる日ひの重圧に押し潰されてしまつただらう。学生時代にも兄は我とわが胸を噛み破る呪わしい性格の責め苦を忘れるために学校を休んで悶々もんもんと釣りに出てゆくことがしばしばあつた。本当の意味において人を愛することも信ず

ること出来なかつた兄にはこれだけが救いであつたらしい。私は今でもその影の暗い後ろ姿をはつきりと目に浮べることができると。それにしても兄は帰り先のない札をもつてどこへ行つたのだらうか。

次にはちようど両手のなかにはいつてしまふくらい小さな急須きゆうすである。本来は水入れだらうがそれを急須に使うように姉が見つつけてきたので、物に当つて壊れないために細かく編んだチョコレート色の網袋で包んである。こんなところにも親切に行き届いた姉の骨身を惜まぬ世話が偲ばれる。兄は七つ道具ともいうべき鉤はり、糸、てぐ

す、おもり、鋏、餌箱、鎌などといっしよにこの急須を小判型の小桶にいれ肩にかけて出かけてゆく。私はその桶の名を知らない。釣った魚をいれる孔が蓋あなにあり、腰かけの代りにもなるもので、小判型の半分を占める浅い仕切りがあつてそこへ七つ道具をつめるしかけになつてゐる。鎌は誰かの真似で草を刈つて焚き火をするため——たなごのしゅんは冬で川風が寒い。——急須は自慢の創意で弁当をつかうときに魔法瓶の湯をさして茶を入れるためである。兄は味にかまわずよく茶をのむほうだった。そこからこんな思いつきも生れたのである。釣り

場でお仲間に茶を入れてあげたら喜んだ。なぞいって得意だった。白園銘茶と朱印のあるどこかの店の袋を切つて拵えたままごためいた茶袋も残っている。袋をはった人も茶を入れた人もあと先にいってしまった。兄は今頃三途の川で茶のないのをかちながら釣りをしてるのだろうか。

兄さんどこにいる

はやく釣りにいらつしやい

ここははとりの藁科川

わらしながわ

鮎もいます うぐいもいる

忘れていった急須もある

茶をいれてあげましょう

はとり名物の新茶

あなたがくれば私は

いつでも喜んで迎えます

もうひとつは四寸に五寸ぐらいのあげ底の桐の箱である。綺麗な紐で結ゆわえるようになってたらしく両側に飾り環がついている。面をとった蓋の裏に 鳩居堂製きゆうきよどう と

あるところをみると香こでもはいつてたのだろう。なかにはまず黒、白、赤のエナメルで塗った大きな海釣りのうき三つ。東京ではぜいご、きす、かいず、ほらぐらいなもの、こんな泛子うきを使ったのを見たことがない。たぶん九大教授のときあちらの海で使ったのだろう。すばらしいのが釣れる話があった。立てて見ればタイ国ビルマあたりのパゴダの形、倒さかさにすれば大名行列の台笠立傘だいがさたてがさにも似ている。その頃は釣りも面白かったらしいが世間的にも兄の全盛時代であった。功名利達を人生唯一の目的とする明治初年人の典型だった兄は人まえもいかかと

思うほど有頂天だったが、その有頂天の最中であつてさえほんの一青書生にすぎない私を無視することができず、陰に陽に人びとの前に私を恥かしめ貶おとしめることに骨を折つた。それを周囲の者が軽率に断定し、兄自身臆面もなく主張するように私に対する父の偏愛に因もとづくともみるのは大きな誤りである。それはいかに根強くとも第二次的原因にすぎない。

もうひとつはやや頭がちの紡錘形の小さな泛子で、ふくらんだつつじの蕾つぼみみたいにぼつたりとしている。たなごに使うために頼まれて私が拵えたのだ。荒川の放水

路が完成して海の水がはいりようになつてからはお得意のわかさぎは釣れず、手長蝦てながえびや鮎ふなは興味がもてず、やまべは季節や釣り場の関係から、鮎は竿が重いうえにむずかしいので足が遠くなり、結局ほとんどたなごの一点ばかりになつてしまつた。たなごといえは子供のじぶん近所の川で飯粒に糠ぬかをまぶつて釣ることを教わつて以来のお馴染みだが、どこにもいて誰にでも釣れたその大衆むきの小魚の釣りがこれほどにまで凝りに凝つて研究され進歩しようとは夢にも思わなかつた。それとも昔からそういうものなので、我われが知らなかつたのだらうか。竿

といい、鉤といい、その結びかたといい、餌のつけかた
 といい、ことごと悉くことごと繊細を極めている。餌は主に俗にヒヨヒ
 ヨ虫という——むつなぎ蛹が出たあとの繭を口にあてて吹くと
 ちようど銀杏の笛みたいにヒヨーヒヨー鳴るところから
 きた名だそうだ。——いら蛾がの蛹を細かく切って使う。
 その豌豆大の繭は白と暗褐色のセメントを練りませたよ
 うな斑まだらをもつて木の枝叉えだまたに固くついている。小石川の
 家では庭の手水鉢ちようずばちのそばのかりんの木に沢山ついた。風
 の強かったあとなど幼虫がそのへんに吹き落されてるこ
 とがあつたが、黄色っぽい裸身に杉の葉に似て刺とげとげし

い緑色の毒針をいくつか突き出し、それが毒液にぬれて？ 不気味にてらてらしている。雀も騒ぐばかりでくおうとせず、蟻ありの穴へいれてやれば大勢かかって押出してしまふ。人間ばかりでなく鳥にも、虫にも、おそらくは獣にもひどい嫌われ者らしいこの虫の餌が、水の世界は別なものか、たなごのまたとない好物なのは面白い。兄は堅い繭を噛みわり、裸の蛹を紙袋にいれてもってゆく。百姓のこやしと同じで釣師は餌を汚ながらない。お仲間の誰かがどうしてこんなにたなごが好くかと思つて口へいれてみたら甘かったとかいう話もきいた。たな

ごのしゅんは冬である。その頃になると脂がのり体色が美しくなる。私はぼろ洋服をきた兄が馬賊みたい目ばかり出す毛糸の帽子を被ってどこかの川の橋杭、または水門のあたりの水の淀みかなにかに糸を投げてじつとこの泛子を見つめてる姿を想像する。気の毒な人に平安！ そのあいだだけ兄は人がかわったようになる。兄だとてなにも好き好んで苦しい人間に生れてきた訳ではない。性格の遺伝であり、その後の境遇、家族制度、誤ったその道徳、教育の結果である。同じ一筋の道を歩いてきた私にはこのことが たなごころ 掌 を指すようにわかる。し

かしその故に反省という道德上の責任を免れることはできなけれども。夕食前後に兄が帰ってくるるとすぐに魚の数を調べて日附や釣り場所といっしよに釣りの日記帳につける。入浴の間に台所で腹を出し、あがれば中皿へずらりと並べたのが茶の間へ持ち出される。はやとかどんことか一匹二匹変り種がまざってると兄はよほど面白いことかなぞのように不自由な口で必ず名をいつてきかせる。日記にもその段遺漏いろうなくつけなければならぬ。それから食事のあいだに網にかけて焼く、姉や女中さんにはほかに仕事があるのでよく私が手伝って焼いた。ち

ようど火鉢に親しむ季節ゆえさして迷惑でもなかった。

脂のにじみ出るのをちゅつと酢醤油につけてたべるのがいちばんうまい。その次は五匹ぐらいつ串にさしつけ焼きにして胡椒こしょうをふりかけたもの。さもなくば白焼きにして鍋のなかに竹の皮をしき、生姜しょうがをいれて甘露煮だんらんのようにする。どれも結構だ。この時が私の家の団欒だんらんといえどもまあ団欒であろう。暖かいから皆茶の間へ集る。母がいたときには親子四人、母が亡くなつてからは兄弟三人。一時兄は続けて川崎へいったことがあった。ちようどその頃私は論語に熱中してる最中だったので姉と顔を合

せさえすれば論語の話をもち出した。そこへ兄は兄で新あらたに見つけたいい釣り場所が嬉しくてならず、帰って長火鉢のそばへ坐るなり人さし指を杭くいの形に立てて クーチ（杭）と杭の話をはじめ。どこかの杭で釣れると
 いうのだ。論語の話はそれでもいくらかかわってゆくけれど杭の話はいつも同じ一つ杭で魚がいなくならないかぎり変らない。はじめのうちこそ姉もほどよくあしらってたものの何分毎朝毎晩のことだものでしまいには話が
 始まると「あーまた論語と杭だー」と悲鳴をあげた。それほど姉を悩ませながら論語はろくな実を結ばなかった

が、杭のほうには大変な魚獲があつた。兄がたなごのし
かけで相当なうぐいを幾本かあげてきた。奇蹟的だ。健
康なじぶんから平生ひどく性急な癖に釣りとなると嘘み
たいに気が長くなる兄が今にも折れそうに挑むたなご竿
で右に左に根気よくあしらいながら、鉤はりもとられず、糸
もきられず、暇にかかつてやつとこさと釣りあげた手際
は確に賞讃に値する。さすがに皆も感心すれば、兄も本
当に太公望たいこうぼうになつたような御気嫌だつた。ところがその
次にまた同じほどのをとつてきた。と、三度めにまたと
れた。杭がうぐいに見えたでもあろう。さあそれからは

釣り場所をひた隠しに隠しだした。そのうちある日釣りのお仲間になにかとよく兄の面倒をみてくださる人がきた時よもやまの話のあいだに私がうっかり口をすべにらせた。と、兄ははち切れそうな赤い顔になって黙りこんでしまった。振り運動みたいに上体を左右にゆすぶっている。爆発しようとする腹立ちをお客さんのてまえ必死にこらえてるのだ。やがてぷいと立って廊下の隅においてあるサシの瓶かめをいじりだした。しまった とは思いながら私も姉もふき出すおかしさをこらえてるのをお客さんは見てとって どうしたのです と目顔できく。姉がこ

っそり耳うちした。で、結局お客さんが誰にも漏らさない と約束してその場はすんだのだったろう。が帰ったあとで私は余憤のおさまらない兄のまえに両手をついて詫びなければならなかった。

それはまあ一場の喜劇にすぎないけれどこの泛子うきの思出にはもうひとついら虫の毒刺に似てひりひりと痛いのがある。二十数年前のことだ。精神的にはとうに崩壊した私の家が——むしろ最初から家を成していなかったというべきであろうか。家族関係にふさわしい感情や道徳が全く欠如し、または一方的でしかない場合にそれを

「家」と呼ぶべきか否かを知らない。——財政的にも行き詰りかけてきたとき、私は今度こそ最後の兄と和解してその家を引受けた。その後私がなにかの事で寓居から家——小石川の家だ。——へいった時ちようど泛子削りに憂き身をやつしてた兄は私にも手伝ってくれといった。で、私は隣りの部屋で削りはじめた。土蔵のわきにある北向きの肱掛け窓のところ、「銀の匙」の主人公がその蔭に隠れて「を」の字のいたずら書きをした整理筭笥もあった。私は心から喜んだ。無量の感慨がしみじみと湧いてくる。それはややともすれば涙となつてまぶた瞼をあふ溢

れようとする。兄にとってこの家は宛さながら火宅であった。私にとっては責め苦の白洲しらすであった。そうして幾度もない私の譲歩と和解と兄の違約裏切をくりかえしたのちここにはじめて正常な友愛の道を踏み出すことができた——たち帰ったのではない。記憶のある限り兄は敵意をもっていた。——感慨に耽りながら私は泛子を削る。注文は細かいし、道具は小刀と鑢やすりだけだし、らかな仕事ではない。やっと一つ仕上げてもってゆくと もう一つと。また一つもってゆくと もう一つと。兄の癖の悪い酒のあとひきと同じでこうなると際限がない。

後でわかったことだが、泛子はエナメルを剥^はがしてみると大抵せんの木かなにかで拵えてある。それを桐の箱の壊れでするので、渋いうえにささくれだつてとても骨が折れる。握り拳を胸にあて力をいれてつづけるうちに胸板が痛んできた。が、もう一つ　もう一つ　はどこまでも続く。そのうちやっと出来あがつた一つをわたし、また　もう一つをねだられて隣りへ戻る拍子にひよいと見たら兄は「しすましたり」というしかたをした。舌を出したのではなかったかと思う。またしてもか！　慣用手段だ。閉じ込めておこうとするのだ。「閉じこめる」に

はせいぜい同情するとしても舌を出す人の悪さに不快を感じないほど私はほとけ性であり得なかった。が、私は見ぬふりをしてそれ以上削るのを断った。案のごとく兄は気嫌を損じた。いつもそんなにして和解が破れるのだった。しかしそのときは低能になった不治の病人に下卑げびた狡ずるさばかりが健全に残ってることに對して情けないいやな思いをしながらそのまま無事にすませてしまった。このまっ黒な泛子である。

わしが兄貴はわらじはいていった

釣れぬ寒鯉かんごいつりたさに

びよくり玉うき ぱくり鯉

唐の寒鯉氷わってはねる

せめて餌えにつけ日本鯉

びよくり玉うき ぱくり鯉

生れおちたる火宅を出でて

しばし息つく水のうえ

びよくり玉うき ぱくり鯉

さずけたまえや川さちたんと

頼む魚籃ぎよらんの観世音かんぜおん

びよくり玉うき　ぱくり鯉

その次は長さ一尺、幅も深さも五寸ぐらいのがつちりした箱型の鞆かばんである。兄は大学のほうだけで開業はしていなかったけれどたまに頼まれて往診する時これに薬品や医療器械などを入れている。竹庵ちくあんの薬箱に相当するものだ。なかには二十枚ばかりのひとからきた端書を重ねて隅をこよりで綴じたのと、二十五字詰十枚ばかりの原稿紙の手紙がはいっている。北垣さんからのが大部分を占め、それが大概釣道具の手入れのしかたや

拵えかたを伝授したものである。姉が兄のために必要と
思うものを^{えら}択んでとっておいたのだ。その姉も兄も北垣
さんも亡くなつた今、私が自分になんの用もないこうい
う物をわざわざこちらへ送つたのは病身の兄に同情して
くだすつたこれらの人びと、特に北垣さんの心からの御
親切に對して深く感謝し、とにかく一度は目をとおして
みたいと思つたからである。兄がいつどここの釣り場で北
垣さんと懇意になつたかは知らない。私が最初にあつた
のは大震災の際だつた。それまでは名まえもきいたこと
がなかつた。その夏私は例年のとおり兄たちを避暑にや

るため寓居から赤坂の家へ留守番に出てきてあの震災にあつた。幾日めだったか洋服をきた小柄な人が見舞いに来てくださった。それが北垣さんだった。幸い焼けも潰れもしなかった家の玄関で水を一杯あげたように思う。北垣さんはその後兄とずっと近しくして、私がなにかの用事で上京したおりに顔を合せることがよくあつた。はじめは元氣らしかったがそのうち体を悪くして職もやめ、自分でも覚悟をきめていられたらしく、いくらとかあれば葬式万端すまされるそうだから安心してる。なぜという淋しい話もきいた。わかりが悪くて言葉も通じない

兄に嫌な顔一つせず手をとるようになれこれと教えてく
だすつたが、とうとう床について姉よりずっと前に亡く
なつた。年もそういつてはいず、お子さんもあるのにな
んともいいようのないことだつた。私が兄の釣り場を口
を込らせたのはこの人の前である。

原稿紙の手紙の一、二枚。

一、竿の塗方

但シ東助ノ方法ヲ聞キカジリマシタノデスガ小石川
松野位ニハ必ズ上等ニデキマス。九月ニ松野ヘコロ

ガシ竿ヲ三間半げんヲ注文シマシタガ塗り方ガ下品デ氣
 ニ入りマセンカラ或人ニヤツテシマイマシタ。自分
 デ塗りマシタ方ガ面白クモアルシ良ク出来マス。
 甲。セシメ漆デモナシジデモニウドンノコヲ混合シ
 テヨクネリマシテコレヲ竿ノ先ニ塗りマシテ上カラ
 絹糸（赤デモ好このみノ色ヲ《東助ハ赤色》）ヲ卷キマ
 スト竿ノ先ノ少シ位ノワレテイル位ハナオリマシテ
 カタクナリマス。コレヲ風呂（漆ヲカワカス箱）ニ
 入レテ充分ニカワカシマス。
 乙。コノ上ニナシジ漆ヲ塗り、カワカシタラマタ塗

リ、三度位ヤリマシテヨクカワキマシタラ

丙。ホオノキ炭ノヤワラカイノデ平ニ水ヲ付ケツケ
コスリマス。平ニナリマシタラヨク洗イマシテ

丁。ソノ上ニマタ二、三度塗りマス。

甲。マタ炭デトギマス。

乙。マタ二、三度塗りマス。コノ時竿ノ全身ニ塗り
マシテ布デフキ取りマス（全身ノトコロダケ）同様
二、三度ヤリマス。私ハ全身ニ塗ル時ハアルコール
デウスクシテ塗りマス。

丙。鹿ノナメシ皮ニホオノキ炭ノ粉ヲツケテ静ニコ

スリマス。

丁。次ニトノコヲ指ニツケテ静ニミガキマス。

甲。次ニ角粉つのこニゴマ油ヲツケテ静ニミガキマス。

乙。次ニナシジ漆ヲ竿全体ニ塗りフキトリマス。コレデ出来上リ。

コノ塗方ハ一年モ経マスト赤イ絹糸ノ色ガスイテ見エマス。東助塗りト申サレマス。シカシコレデ東助ノヨウニ出来ルヤ否ヤハ知リマセンガ確ニ似タモノガ出来マス。

乙ノ時ニ金プンヲチラシマス。風呂ニ入レテカワカ

シソノ上ニ二度モ塗りマシテミガキマスかねなしじト金梨地ト
 言ウノガ出来マス。銀梨地ハ銀ブンデナクスズノ粉
 (コレハ秘密ダソウデス) 金梨地ノ竿ハ竿さおこう幸力竿さおへい平
 ノ塗方デス。面白クナイ塗りデス。

竿ノモトノ方ハロイロノ黒ヲ二、三度塗りマシテソ
 レデ宜シイヨウデス。平ニトグノハ同様デス(竿先
 ト)

竿先ニ糸ヲマキマシタラアラビヤゴムカ何カデ一度
 糸ノ上ヲ指ニツケテケバヲ平ニスルト漆ガヨクノリ
 マス。渋デカタメルノガ良イト思ウ。以上。

右のほかには漆の用法、道具、器具、色合、材料、等、二回にきたらしい十枚の紙に収まで入れて細ごまと説明してある。これらは少し深く釣りの道にはいった人ならあるいは誰でも知ってることかもしれないし、よりよいしかたもあるのかもしれない。が、それではない。固もとより好きな道ではあるうけれども私はそこに通り一遍のおつきあいをこえた有り難くも貴い真情を見るのである。欄外には蜘蛛膜下の溢血前と思われる姉の手でじかにきいたらしい事が書きいれてある。

秦^{はた}様からの口伝。ホオノ木炭でといてその次はト石で
ホオノ木炭をおろしてその汁を布につけてみかく。と
のこでみかく。

フキうるし。キジヨウミでふいてよくふき取る位にす
る。二度斗^{ばか}りフク。

北垣様より。竿のすげこみを塗るのにはロイロを三度
も塗ってからとぎだす。

フキうるしはスキノ上花とセシメを半々にする。
うるしの手を洗うのには純シヨウノウ油がよろし。

竿のワレタのは其所そこに次の竿を差込こんましてウルシを塗り糸を巻きサシ込こんだ処ところをウルシでかたまらぬようにふき取りまた差込みかわかす也。等。等。

小菊大に切った紙片には 竿の内部にうるしを塗る方法がうつしてある。

油はテレピン、ゴマ、トボシ、何でも可なり。但しテレピン上等なり。差上げた油はセシメ漆に混ぜる。油を漆に混ぜる分量は一口に言えない。セシメのやわら

かさによるので半々でも三分ノ一、五分ノ一でも可の時あり不可の時もあり。二、三度試験して見るが良。しかしおおよその処はチョコ半分に油二、三滴位。普通竿の中に塗りますのはアズキ（おしろこにする）バラ玉（鉄砲）等を用います。油で少しやわらかになったセシメを竿の中に注ぎ込みましてアズキなりバラ玉なりを入れて上下にシンドウささせて塗るのです。竿の尻には栓を紙位で簡単にしてうるしの出ないようにして置く。一本塗りましたらば二本目に注ぎ込みます。以下同様。

タナゴ竿のように細い物はアズキでは大き過ぎるよう
なり。鉛のバラ玉（凶略）これ位から（凶略）これ位
のでも大きいかと思ひます。竿の先に小切を丸くつけ
てポーズを作りウルシを充分ふくませて塗るのは如何
でしょう。但しポーズは取れないようにかたく付け
種々大小を作る。

間あいだに猪口だの、釣竿だの、人が漆を塗つてると
ころだの、ほほえましい凶解がはいつている。器用だと
はいいながら姉は自分がいささか些の趣味ももたないこうした

細かい仕事を先ず一通り覚えなければならぬ。兄にはちよいとにはのみ込めなればかりかじきに忘れてしまふ。そのとき二度でも三度でも教えるのが姉の役だった。

兄はさいさいお仲間へ端書を出したがった。頼みたいこと教わりたいことはあつても釣り場でひとにいうことができず、先方の話がよくわからずに帰ってくることも度たびあつた。それを端書に代筆することがなまやさしいことではない。聯絡れんらくのない断片的な言、間違いだらけの孤立した漢字、幼稚園の子供がかいたみたいなどから手がかりをつけて何をいつてやりたいかを察し

なければならぬ。頭が悪くても話は必ずしも簡単でない。こちらで目くら捜しにああこういってみて的あたに中るのを僥倖ぎょうこうするよりほかない。そのあいだにも兄は兄でどうかしてわからせようとあせってひとつかた言、ひとつ漢字、ひとつ図をいくつもかいてるうちに——そうするつもりではないのかもしれないがそうなってしまふのだ。いい方をかえるほどの智慧はない。——だんだん焦じれて、上気して、苛立って、声が高くなって、しまいは頭を搔きむしって怒鳴りたてる。気の毒とは思っても話が釣り場での出来事に絡んでる場合なぞ居合せない者

には取りつく嶋しまもない。一枚の端書のためにそんな息のつまりそうな状態が幾時間も、半日も、一日も、時には幾日も続くことさえあった。私はもの凄いい形相になった——酒を飲んだときは特にひどかった。とても悪い酒癖だった。——兄の前で身も世もなく情けなくなつて泣き出してしまふ姉の姿を思い出す。そんな時私は見かねて助け船を出すのだった。二進にうちも三進さうちもゆかなくなつた問題に正面からぶつかつてますます兄を苛立たせることをせず、問題を変形し、轉換し、緩和し、とにかくなにか端書をかいて気をしずめ。徐おもむろに先方の返事を待つ

というような方法をとった。姉はまた釣道具の手入れや製作、もつれた糸を解きほごすなどの仕事に頭も手も充分に働かない兄の手伝いをして夜をふかすこともしばしばあった。疲れはてて寢室へはいつてからも兄の病気の再発を気づかかって一つのしわぶきにも一遍の讒言うわごとにも目をさます姉であった。それほどまでに心を痛め身を苦しめて奉仕したあげくに報いられるものは怒罵どばと侮辱、白眼と讒誣ざんぶ。

私のいおうとするのはこれである。こういう場合にその苦難の奉仕が道徳上当然の義務であるとの理由によつ

てそれに対して人情上当然の感謝と同情を払おうとしな
いのはたとえ手を下さずとも立派に気もちのうえの虐待
である。昔兄もまた半ば同様な位置におかれたことがあ
ったのだが。

最後に残ったのは小型の箱入りの検眼鏡である。びろ
うどの座に長さ四寸ぐらいの検眼鏡と大小七個のレン
ズ。兄が性格として、またその時代の青年の一般的傾向
として人生唯一の目的とした名声——必ずしも名誉では
ない。——栄達へのにぎにぎしい門出ののち僅か数年に
して無頼に中絶した不運な行路の記念品である。私はそ

れともう一つの遺品、明治四十二年から亡くなる時まで三十幾年の釣日記とを並べてみてそぞろに涙を浮べた。兄がもしこの検眼鏡の孔から自分の運命のせめて一年先を見ることができたならば！ 亡くなった姉の父の不幸のことで福岡から上京した兄は帰る前の晩親戚の者と元氣よく酒をのんだ。が、翌朝来客があつて呼び起され二階からおりてきて茶の間に坐つたまま黙り込んでしまつた。失語症！ その時から兄は癡人だつた。禍わざわいは青天の霹靂へきれきのごとくに落ちかかった。その時から私ども一家——兄と姉と母と私——の生活はがらりと一変した。引

続く数十年の陰惨な生涯。もしこの事なくばその後堆うずたかく積まれたであろう研究報告のかわりに兄はここにある五冊の釣日記を残していった。そして全快を喜んだであろう多くの患者のかわりに鉤はりにかかった無数の魚。あわれ一癱人の釣日記。時めいた少壮教授の検眼鏡。今や独り生き残った私はそれを目にあて、その孔をとおして興ざめなる人生の空白を見る。

日本文学電子図書館

遺品

著者：中 勘助

制作者：宮澤一郎

底本：「中勘助随筆集」
岩波文庫、岩波書店

1985年6月17日 第1刷発行



日本文学電子図書館